

略語やカタカナ語の反乱、嘆かわしく思うことしばしばですが、そもそも意味がわからない場合も少なくありません。ここでは大学教育の周辺で最近よく使われる言葉を確認しておきます。

<p>アクティブラーニング (Active Learning)</p> <p>アクティブ・ラーニング (AL) は、2012 年の中教審答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』で「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」に登場しました。2017 年公示の学習指導要領改訂案からは AL の用語はなくなり、AL は今では主に大学教育の文脈で使われています。「主体的・対話的で深い学び」がどのように達成されるのか、AL 的であるべき授業がどう実現されているかの検証など、学びの提供について多くの議論が重ねられています。</p>
<p>ジェネリックスキル</p> <p>ジェネリックスキル (generic skills) は、2008 年の中教審答申『学士課程の構築に向けて』において、「汎用的技能」と表現される「知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能」として定義されており、問題解決や判断を支える「社会を生き抜く力」および「考える力 (クリティカルシンキング)」であり、専攻分野にかかわらず学部教育で習得すべき学士力の構成要素です。ただし、修得すべき内容を具体的に定めて評価・単位卒業認定することは大学教育において未解決問題です。</p> <p>本学では、学生基礎力測定テストとして PROG (Progress Report on Generic Skills) を新入生に実施し（現在は一部）、知識を活用して問題解決する力（リテラシー）と経験を積むことで身についた行動特性（コンピテンシー）の 2 つの観点でジェネリックスキルを測定しています。</p>
<p>ポートフォリオ</p> <p>書類入れや資産を意味するポートフォリオ (portfolio) は、大学教育においては「学生が学習や技能などの実績を実証するための成果をある目的のもとに組織化して集積したもの」を学生ポートフォリオと呼んでいます。必要な知識を収集・統合し適切な判断を下しながら課題解決を図る力が必要だとする最近の教育観の変化に呼応して、その蓄積プロセスにおける振り返りが理解を深めたり興味を掘り起こす真性な学習となるという学習者が主体となって知識が構成されるという考え方です。ポートフォリオであるためには溜めることだけを目的とせず、収集しながらそれらを自己評価する行為を学習活動に含める事が大切になります。</p>
<p>GPA (Grade Point Average)</p> <p>成績評価方法の一つで、授業ごとの成績評価を 6 段階 (SABCDE) で評価した上で、それぞれに対してたとえば 4・3・2・1・0・0 のようなグレード・ポイントを付与し、獲得単位当たりの平均値 (GPA) を算出する方式です。GPA はアメリカで広く使われてきましたが、日本でも教育の実質化に向けた取組の一つとして GPA 制度を導入している大学数は増加傾向にあり、平成 23 年の 453 大学 (62%) から平成 27 年 634 大学 (85%) になっています。</p> <p>GPA による厳格な成績評価の実施は、学生自身による所属学部での成績位置の確認や学修行動への動機づけだけでなく、奨学金や授業料免除対象者の選抜基準、個別の学修指導、卒業・修了の判定基準に活用されています。ただし、欧米型 GPA は相対評価であるため、絶対評価としての比較ができないなどの指摘があり、また GPA だけが学生の能力を示すものでもありません。</p>
<p>PDCA</p> <p>PDCA とは、事業活動などを継続して改善していくためのマネジメントサイクルの一種で、Plan (計画) → Do (実行) → Check (評価) → Action (改善) を繰り返す手法です。大学は自ら学習成果の適切な評価を基盤とした学位の質を保証する責任があります。PDCA サイクルは大学における内部質保証システムを駆動するエンジンだと位置づけられています。</p> <p>ただし、何をどうやって自己評価・外部評価するか、その結果をどう改善するのかという本質的課題についての統一的理解はなく、PDCA を唱えたからといってサイクルが自動回転して改善が達成されるわけではありません。目標についての認識共有と相互信頼に支えられた情報提供など相応の組織力や FD/SD 活動への積極的な取り組みが必要です。</p>

学長室へご意見をお寄せください

Daito toDay は、大学執行部が何を考えどこを目指しているのか教職員の方々が知りたい旬の情報を届ける学長室広報誌です。大学を実際に動かすのは皆さん一人ひとりの考えと創意工夫です。生き活きた大学であるために皆さんの力が是非とも必要です。感想や取り上げてもらいたいテーマなど皆さんからの声をお待ちしています。po@ic.daito.ac.jp でも連絡いただけます。

Daito toDay



花咲く五月号

Vol. 2



発行日	2018年5月1日	〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1
発行	大東文化大学学長室	po@ic.daito.ac.jp
編集	学長室	http://www.daito.ac.jp/president_blog/

学生が主体となって、生き活きと躍動する大学へ

飛躍の年に！

今年は、いわゆる「2018年問題」^{※1}が始まる年です。しかし、奇しくも今年は本学創立の95周年に当たります。100周年に向けてのカウントダウンが始まる年です。私は、逆に、この年を好機と捉え、昨年度取り組み始めた教育改革をさらに加速し、存在感のある大学にしていきたいと思っています。^{※1}大学入学年齢である18歳人口が、2018年から再び減少していくという問題。

初年次教育の改革

教育改革において最初に取り組みなければならないのは、改めて言うまでもなく「初年次教育の改革」です。

昨年は、そのために9月に「大東文化を元気にする学生リーダー育成プログラム」という2日間のセミナーを実施しました。この学生リーダー育成プログラムは、こうした活動に参加する前の基礎的能力を養うことを目的としたものです。今年も、大東文化大学を元気にし、社会で活躍する大東人を目指す学生を育成していくことにしています。

またさらに、学生リーダー育成プログラムに参加した学生を中心にして「Daito Education PLUS」(以下「D.E.P.」)を立ち上げました。通常の授業にPLUSして、学内の様々な活動を学生の学びの場に変えていこうとする取り組みです。

「D.E.P.」の最初の活動として、昨年12月2日に「TOKYO 2020 キックオフイベント」を実施しました。これは「TOKYO 2020 オリンピック大会」の開催に向けた学内の気運醸成と学生のボランティア活動に対する意識を高めるために開催されたもので、「D.E.P.」の学生スタッフが初めて企画・運営に携わったという点では、本学にとって記念すべきイベントとなりました。

その後、「D.E.P.」の活動として、さまざまな行事が実施されましたが、その一つに「2018年度入学式」がありました。この入学式は、さいたまスーパーアリーナで行われましたが、このような式典自体を初めて挙行いたしました。二部構成の第一部から第二部まで、「D.E.P.」の学生スタッフが入学式の企画・運営の全てに手作りで取り組み、主体的で画期的な式典となりました。ひとえに、「D.E.P.」の学生たちの頑張りのお蔭で、当初の予想をはるかに超えた感動、感動、感動の嵐、大盛況の入学式となりました。

今後も、「学生が作る大学」を作ることによって、学生が主体となって、生き活きと躍動する大学にしていきたいと思っております。教職員皆様のご支援、ご協力のほど、是非、よろしくお願いいたします。

IR元年「勘からデータ」へ

大学を取り巻く環境が大きく変化する中で、本学が持続的に成長し発展していくためには、戦略的な大学運営が不可欠です。学長が、将来の基本構想に係る方針や施策を策定し実施するためには、学長の指示を受けて、必要な補佐を迅速に行う組織が必要です。そこで、新たに学長室を設置しました。

学長室の大きな役割の一つにIRがあります。(Daito toDay Vol.1をご参照ください。) 将来の基本構想に係る方針や施策を策定し実施するためには、さまざまなデータを学長室に集約する必要があります。今年度は、各部署に分散しているデータを集約すると同時に、入学前教育やジェネリックスキルの測定で得られた新しいデータを収集し分析します。これらの収集、分析は、教育改革や入試改革に活用します。

新年度を迎えて～学長から教職員のみなさんへの七つのお願い～

新学期が始まり、いよいよ創立95周年から100周年に向けて、教育改革を積極果敢に大きく推し進めていきたいと考えています。その教育改革の方針の中心には「建学の精神」「教育の理念」、そしてそれに基づいた「三つのポリシー」がなくはなりませんし、我々が行う教育の対象は学生ですので、学生を第一に考えての推進でなければなりません。さらに、教育に携わる全ての人が改革に参画するという意識を持たなければなりません。

そのような思いから、昨年の8月の事務職員総会で、事務職員の皆さんに次のような七つのお願いをしました。ここに掲げた「七つのお願い」は、教育職員の皆さんにもお願いしたいことですので、ここにもう一度掲げたいと思います。


- ①「建学の精神」に立ち返って、大東文化大学を大切にしよう！
- ②全ての仕事が「三つのポリシー」に繋がるようにしよう！
- ③「学生第一」の原点に戻って自分の仕事を振り返ろう！
- ④大切な友人を「自宅にもてなす気持ち」で対応しよう！
- ⑤本気で「世界一の教育」を目指そう！
- ⑥「一人一人が改革に参画する」という気持ちを持とう！
- ⑦一緒に働ける「縁」を大切に、「人間として」成長しよう！

いま目の前にいる学生のために、そして将来大東文化大学に入学する学生たちのために、全教職員の力を結集して教育改革を進めていきたいと思います。


学長の自己点検・評価～Daito 再生プロジェクトの進捗について

大東文化大学を活性化し一層発展させるために活動を加速させているプロジェクトの様子を自己点検・評価してみました。ここに書かれていない他のプロジェクトについても皆さんと力を合わせてさらに発展させていきます。学長の笑顔は、着実に結果に結びついているプロジェクトであることを示し、学長の真剣な顔は、鋭意取り組んでおり成果を生み出しつつあるプロジェクトであることを示しています。

学生確保のためのプロジェクト

 入試広報部を総合的に発展させた入学センター創設

地域連携のためのプロジェクト

 地域住民等への生涯学習の貢献

笑顔の学長




真剣な学長





2

財政改善のためのプロジェクト

 寄付金、補助金の戦略的な確保について組織的な検討開始

キャンパスの再開発プロジェクト

 緑山キャンパスの再開発
健康・看護・スポーツの一体化、関連施設の建設計画

 信濃町校舎の移転

学生のためのプロジェクト

教育体制

入学時、初年次教育の充実


 ・Daito Education PLUS

・全学入学前教育


・PROG テストの部分的開始


支援体制


 2018年4月から混住型留学生宿舎グリーンハウス

 久喜便の開設（鴻巣便とで2系統の遠隔バス通学便）

大学運営のためのプロジェクト

 副学長5人体制化と権限強化

 学長室の創設
開かれた大学および学長活動の整理、情報分析と施策支援

 危機管理体制の構築

中村年春 副学長

国連「持続可能な開発目標（SDGs）」と大学の社会貢献
SDGsは、貧困や飢餓の解消、格差の是正、健康と福祉の増進、質の高い教育の普及、ジェンダーの平等、ディーセント・ワーク、責任ある生産と消費などグローバルな課題を2030年までに15年をかけて解決していくための行動計画です。これから、われわれはSDGsが掲げる目標を達成すべく力を尽くすこととなります。世界のすべての大学にとって、このSDGsが目指す公正で持続可能な社会の実現に向けて、その責任を自覚し、行動し、連帯する市民の育成が重要な教育目標となり、最大の社会的使命となります。

浅野善治 副学長

日ごろ感ずることに、学生の皆さんがキャンパスで集う姿が少ないということがあります。もっとキャンパスに滞留したくなるような大学に、卒業後ももっと大東を感ずる大学生活になって欲しい、そんなことを願って仕事に取り組んでいます。

青木幹喜 副学長

この1年間、マネジャーの仕事の断片性、受身性を実感してきました。
私たちはじっくり物事を考えられているわけではありません。誰と会うかも自主的に決められているわけではありません。こんな中、走りながら大東にとって大事な戦略を創発的に作り、実行していきたいと思っています。

大東文化大学の教育基盤 Daito BASIS

大東学士力

1. 地球的規模の視野と感覚を持ち、異文化への理解力・共感力、コミュニケーション能力を持ち、諸問題の解決に貢献できる。
2. 豊かな人間的教養と高度な専門的知識・技術を持ち、現代社会の諸問題にチャレンジできる。
3. 修得した専門的知識と技能を使って、社会の中核・中堅として、その発展に貢献する意欲と能力を持っている。
4. 自分の意見を持ち、それを適切に表現し、他者と協力・共同する能力を持っている。
5. 大東人として、また人間としての誇りと自信、社会の担い手としての強い使命感・モラルを持ち、行動できる。

将来基本計画『DAITO VISION 2023』には、本学の「建学の精神」「教育の理念」に基づいて、本学が育成しようとする能力と人格、いわゆる「大東学士力」が掲げられています。それを実現するためには、まず、その基盤となる資質や能力を、本学の全学生が大東生として養っていく必要があります。そのために、現在、次の4つの分野を想定し、全学共通科目、基礎教育科目の中のいくつかの科目を基盤教育科目（「Daito BASIS」と名付ける）として指定し、2019年度から全学生に推奨することを考えています。

- I 人間性の涵養
- II 国際性の確保
- III 社会人基礎力の養成
- IV 心身の基礎力の育成

科目としては、「I」の「人間性の涵養」は、人間としての感性の醸成や伝統的道德心を涵養するために書道と論語、「II」の「国際性の確保」については、国際的コミュニケーション能力の基礎力の確保のために英語、「III」の「社会人基礎力の養成」については、生涯を視野に入れた社会人としての資質の養成のためにキャリア、「IV」の「心身の基礎力の育成」については、社会人としての心身の基礎力を育成するために体育を考えています。

Daito BASISの2019年度からの実施にむけての手順は次の通りです。

学長の命を受けた担当副学長・センター長の下に、それぞれのワーキンググループを結成し、その代表者により形成された「Daito BASIS 実施委員会（仮）」において具体的実施策を作成します。

入学前教育と高大接続

大東文化大学では既に各学部それぞれ独自に入学前教育を行っていましたが、2018年度の入学生から学部の特質を活かした全学での入学前教育体制を整えました。

文部科学省は大学入学者選抜実施要項の中で「各大学は入学手続きをとった者に対しては、必要に応じ、これらの者の出身高等学校と協力しつつ、入学までに 取り組むべき課題を課すなど、入学後の学習のための準備を講ずることが望ましい」と明示したことを受けて、多くの大学では指定校推薦合格者やAO入試合格者などに対する取組みとして入学前教育を制度化しています。

入学前教育の目的には学習習慣の維持・開拓や大学での学修に対するさらなる動機づけなどを挙げることができますが、その効果検証が課題とされています。本学では、入り口においては本年度より部分導入したPROGテストによって大学だけでなく入学生自身が現状を客観的に把握し、高大との接続を補強しながらDaito BASISという仕組みで初年度教育を整えて、学生一人ひとりを育てる体制を用意します。

副学長・学務局長から

高橋進 学務局長

大東文化大学の将来を方向づける大事な一年が過ぎました。誰もが大学改革に真摯に向き合わなければならないことは知っていました。その方向性が定まらず躊躇せざるを得なかったことも事実です。しかしながら、改革の扉は、打ち破られました。迷わず邁進します。

中村昭雄 副学長

4月から東松山担当の副学長、入学センター長、ピアトリクス・ポスター資料館長に就任しました。入学センターは、高大接続改革、特に2020年度から実施されるセンター試験に代わる新しい「大学入学共通テスト」に、本学もしっかりと対応していかなければなりません。

河内利治 副学長

執行部の出身地は兵庫・東京・大阪・埼玉・栃木・三重・青森。中国周代に七賢人（論語）、魏晋には竹林の七賢、古代ギリシャにはすぐれた哲人・為政者の七賢人がいる（プラトン説）。七賢人が七賢人になるにはチームワークの発揮が一番です！

3